

衆院選を迎えて ニッポン前へ委員会

空気に流されず 現実見極めて



日本総研主席研究員

藻谷 浩介

原因で、資源国以外との競争は日本が優位にある。

震災と超円高に見舞われた昨年の経常収支を見ても、対中国（香港含む）の黒字は史上2番目の3兆円弱だったし、対韓国の黒字も2兆円弱と10年前の2倍だった。ロンドン五輪のメダル総数38個は日本史上最多だったが、金メダル7個も、バブル直後のバルセロナ五輪の3個より格段に多い。

そもそも、「理念」や「覚悟」を掲げて「抵抗勢力」や「外敵」を制圧すること、が政治ではない。現実認識を欠いた気合の先走り、利益を害するだけだ。政治家に求められるのは、理想と現実の隙間を粘り強く埋めていくという、まったく派手さを欠いた作業なのである。

民主党マニフェストの蹉跌も、財源不足という現実の軽視から始まった。「本気で官僚をたたけば埋蔵金が出てくる」との精神論に染まり、「財源の話は、やる気のない者の逃げ口上だ」と決め付けていたのではないか。

今般の衆院選で各党の唱える、「経済成長」「デフレ脱却」「豊かな生活の実現」なども同じで、「理念」「覚悟」「抵抗勢力打倒」の3点セットだけで実現する話ではないだろう。

日銀が世界に例を見ない金融緩和を多年行ってきたのに、デフレが止まらない日本。政府が世界最大の借金王になるまで景気対策を続けてきたのに、税収は下がる一方の日本。欧米発祥の経済学の教科書通りには進んでこなかったこの国の現実から目を背けたまま、「もっと気合を入れてもう一回」をやっても、同じ失敗を繰り返すだけだ。

だが「理想の候補」を待っていても進まない。少しでも「まし」な候補、少しでもよく現実を見て、精神論に終わらない打開のプロセスを示している候補を、比較して選ぶ以外に手はない。問われているのは政治家の見識というよりも、有権者自身の学習能力である。

急転直下の衆院選。だが、これで日本の未来に青空が広がると感じている有権者は少ないだろう。何より、「今の日本はダメだ」といたずらに有権者の不安をあおる候補が多すぎる。政治家の演説もマスコミの報道も、「日本は国際競争に負けている」という「空気に」染まっている。

現実はそのようではない。統計の絶対数を確認して欲しいのだが、日本の輸出額は2年半前からほぼ横ばいで、バブルの頃より1.5倍も多いのだ。足元の貿易赤字は、輸出減ではなく燃料輸入の増加が